

オーディオ・コンサート
第2回「われら、自作派」開催

9月27日(土)午後アビスタホールで開催されたコンサートは歴史的大盛況。オーディオ・コンサートはこれで2回目だが前回よりこの狙いを明確に訴えるサブタイトルは好評。テーマは「アナログレコードから最新デジタルオーディオまで」

今回は特につくし野例会場から常設機タンノイモニター215を運び込み1本85kgもある大型SPを鳴らし強烈なインパクトを与えた。発表者は4名

真空管300Bの柔らかな音で歌謡曲。真空管6CA7などを使い磨き抜かれた音で音楽を鳴らす。10cmSPのコイン紙の違いによる音比べ。全てデジタル仕様にて小型SPで大型並みの音を楽しむ。と各人各様で興味深い。展示コーナーは一段と充実、今回大型送信管を含む真空管セットがあり、会のマニアックな一面を見せる。休憩時間に鳴らした蓄音器の自然な音は不思議と心を和ませる。

20周年記念米ポピュラーSP復刻CD披露では拍手とアンコールの声あり。お客様持参ソフト試聴は要望多くとても全部は消化出来ず。最後に会員持ち寄りCD40枚と前記復刻CDをプレゼントして閉会。何とも盛り沢山の内容でした。



特筆すべきは100名近い来場者。用意したプログラムでは足りず、会員から回収して配る始末。終始熱気溢れた雰囲気は開闢以来。早くも入会希望者が数名、オーディオ・音楽ファンの裾野はまだまだ広いものと心強い。発表・企画・運営・実行にあたった全会員の情熱、底力は我がAAFCの誇りであります。

記録 脇田隆夫

オーディオと私



小笠原 富雄

一、蓄音機事始め

長い間、自作の真空管アンプでLP・CDを聴いてきましたが、10年程前より筑波で定期的に行われている「蓄音機によるSPレコードコンサート」を聴き始めてから、次第に蓄音機の音に惹かれ始め、5年程前に遂に蓄音機を自作(佐藤温夫さんから頂いた蓄音機を改造)し、この世界に踏み込んでしまいました。

二、蓄音機原音再生論

蓄音機の音は再生帯域が狭く、雑音も歪も多く、LPの様にきれいな音ではありません。しかし、独特の魅力があります。何故か？

それは、ラッパ吹込み・蓄音機再生と言う「簡単な仕組み」こそが、全てのオーディオ機器の中で最も優れた「原音再生機」だからではないでしょうか。初期のエンジン蝸管蓄音機で解るように、簡単な仕組みで録音・再生ができるのです。

空気の振動↓↓↓振動板・録音針再生針・振動板↓↓↓空気の振動

これは子供の糸電話と同じで、原音に恣意的に人手を加えようがありません。勿論、機械的な制約や、ホーンの高さの制約もあり、再生帯域は高々100Hz〜5000Hzですが、その帯域内では原理的に「理想的なオーディオ装置」(注一)ではないでしょうか。「歌手が目の前で歌っているようだ」と評されるのも、あなたが誇張ではない気がします。

翻って、今のCD録音・再生を考えるとみますと、まず録音技師の前には沢山の部品、ポリウムが付いた大きな調整卓があり、再生機器には音が良くなる(変わる)と言われる部品・ケールが使われ、スピーカーは複雑なマルチ・チャネル、これらを録音技師、リスナーが自分の好むように調整しているが実情ではないでしょうか。

写真に例えれば、デジタルカメラやプリント機器の中で画面の色調を変えたり輝度を変えたりして美しく修正するように、きれいであります。かなり修飾された音を聴いているのではないのでしょうか。CDは先端技術により創られた、優れた「音楽鑑賞機」ですが、原音再生機とは言い難いと思います。

電気録音になってからのSPレコードには加工が加わりますが、これとて初期の電気録音は簡単な機器だけに、加工度は少ないと思います。

三、蓄音機事終わり

蓄音機とSPレコードは、既に過去の文化遺産となってしまうました。蓄音機博物館は私の知っているだけでも全国に7か所あります。そこに保管されている蓄音機は傷んでも修理が効きませんが、SPレコードは修理できません。残念ながら、過去の貴重な演奏芸術(注二)は失われつつあります。

現代の最新技術で超精密・軽量・高コンプライアンスなサウンドボックスと画期的な新材料で雑音の出ないSPレコードができないのでしょうか。

蓄音機賛美に終わってしまいました。ご容赦下さい。今後ともよろしくお願いたします。

会報28号「オーディオと私」より
(注一)横田様の見解
(注二)横田様の言葉



会員手作り蓄音機

2013年
「SPレコード鑑賞会」
旧村川別荘にて